

成田
歴史
玉手箱

47回

歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。

復元された竪穴住居



完成後カマドに火が入る

復元された竪穴住居

古墳時代の暮らしをのぞいて見よう

千葉県立房総のむら風土記の丘資料館裏に1棟の古墳時代(今から1400年前)の住居が、4月12日、一般公開されました。柱などの木材の伐採から屋根の萱葺きまですべて手づくりで、当時の建築手法に近い状態で製作・復元された住居です。

この時代の住まいは、地面を50cm~1m掘って萱などを屋根に葺いた半地下式の竪穴住居と呼ばれるものです。形は正方形で一辺の長さは5m。この大きさは古墳時代の標準的な家で、畳14~15枚分に相当します。竪穴住居に入ったことがある人は、そんなに広いのかなと感じるでしょう。それは柱が建物の中にあること



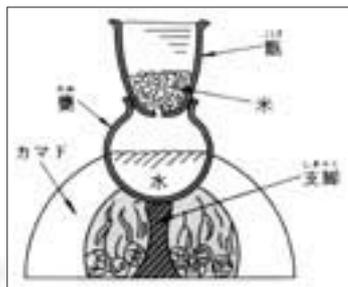
丸太と竹を使って住居の骨組み作業をする小学生とボランティア(千葉県立房総のむら提供)

や屋根が急角度のため圧迫感があるためです。入ったことがない人は当時の家の中をのぞいてみませんか。

一般的に古墳時代の住居の特徴として入口の反対側奥にカマドが作られます。これは二つの大きな意味があったと考えられます。一つは住居内が機能的になったことです。カマドが導入される以前は住居の中心に炉があり、限られた空間しか利用できませんでした。しかし、カマドが一番奥にあることで室内を広く使えるようになりました。まず冷蔵庫の役割を果たす貯蔵穴(ちよぞうけつ)がカマドの脇に移動し、台所という空間が意識されました。また、発掘調査で床の部分をよく観察すると、とても硬い部分と柔らかい部分が見られます。前者は作業場や居間に、後者は寝間に利用されていたと考えられています。

二つ目は右図のようにカマドに蒸と甑を載せ「蒸器=せいろ」として使用され、一般化したことです。食物を煮炊

きすることしかできなかったものが、蒸すことで調理方法に変化をもたせ、食生活を豊かにしました。このように古墳時代の住居は、カマドの普及や機能面で、一昔前のわたしたちの生活につながる暮らしの転換期だったといえるでしょう。



カマドの使用法「図説成田の歴史」より

今後、復元された竪穴住居は、勾玉(装身具の一つ)づくりや古代米の試食、カマドでの煮炊き体験や古代人の生活様式を体験する場として利用される予定です。県内有数の規模を誇る龍角寺古墳群を有する風土記の丘内を散策や森林浴を兼ねながら、古代人の暮らしに触れて見てはどうでしょうか。

編集後記

「えびがにつり」に「たけのこ掘り」、「落花生づくり」に「手打ちそばづくり」。何かといえば、今年度公民館が主催する教室や講座のメニューの一部です。本紙でも毎年幾つか取材して表紙やトピックスで紹介しています。写真を撮る

側からすれば、まさに被写体の宝庫。真剣に取り組む姿、楽しさいっぱいの笑顔、どれもが絵になります。ことしも「黄色の腕章」を付けた本紙記者がお邪魔する予定です。ただし、ピースとカメラ目線だけはご勘弁を!